シンポジウム7

若手歯科医師に伝えたい歯科訪問診療の必修事項

座長：
古屋 純一（昭和大学　歯学部　口腔機能管理学部門）
小玉 剛（こだま歯科医院）
Sun. Jun 18, 2023 8:20 AM - 10:20 AM 第2会場 (3階　G303)
企画：在宅歯科医療委員会

【古屋 純一先生 略歴】

古屋純一（ふるや じゅんいち）
昭和大学歯学部　口腔健康管理学講座
口腔機能管理学部門　主任教授

【学歴・職歴】

1996年3月　東京医科歯科大学歯学部歯学科　卒業
2000年3月　東京医科歯科大学大学院歯学研究科 高齢者歯科学専攻　修了
2005年8月　岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座　助手
2008年4月　岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座　講師
2010年4月　岩手医科大学歯学部歯科補綴学講座　有床義歯補綴学分野　准教授
2013年1月～2014年3月　Harvard School of Dental Medicine, Department of Restorative Dentistry and Biomaterials Sciences留学 Visiting Associate Professor
2014年4月　岩手医科大学歯学部　補綴・インプラント学講座　准教授
2015年5月　東京医科歯科大学大学院　地域・福祉口腔機能管理学分野　教授
2020年5月　昭和大学歯学部　高齢者歯科学講座　講師
2021年4月　昭和大学歯学部　高齢者歯科学講座　准教授
2023年4月　昭和大学歯学部　口腔健康管理学講座　口腔機能管理学部門　主任教授

【理事・評議員】

日本老年歯科医学会 理事・評議員（在宅歯科医療委員会委員長、ガイドライン委員会委員副委員長、社会保険委員会委員）
日本摂食嚥下リハビリテーション学会 評議員（編集委員会委員）
日本臨床栄養代謝学会 学術評議員
日本咀嚼学会 評議員（編集委員会委員）
日本補綴歯科学会 評議員（用語検討委員会委員）

【認定医・専門医】

日本老年歯科医学会専門医・指導医、日本老年歯科医学会摂食機能療法専門歯科医師
日本補綴歯科学会専門医・指導医
日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士

【小玉 剛先生 略歴】

昭和58年3月　城西歯科大学（現・明海大学）歯学部　卒業
昭和60年3月　東京医科歯科大学歯学部専攻生　修了（口腔外科学）
昭和60年6月　こだま歯科医院　開設
平成元年3月　東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了（歯科理工学）歯学博士
平成3年4月～平成23年3月　東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工士学校講師（非常勤）

©Japanese Society of Gerodontology

平成5年4月～平成9年3月　東京医科歯科大学歯学部講師（非常勤・第二理工学教室）
平成17年4月～平成28年3月　明治薬科大学 客員教授
平成25年6月～平成29年6月　一般社団法人　東京都東久留米市歯科医師会　会長
平成28年3月～　公益社団法人　日本歯科医師会　常務理事
平成28年3月～令和3年6月　公益財団法人　8020推進財団　常務理事
令和3年6月～　公益財団法人　8020推進財団　専務理事
令和4年11月　社会歯科学会　理事長

[SY7-3]訪問での全身管理、私はこうする

〇若杉 葉子[1] (1. 医療法人社団悠翔会　悠翔会在宅クリニック歯科診療部)

【略歴】
2004年　東京医科歯科大学歯学部卒業
2008年　東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野修了
2008年　東京医科歯科大学歯学部附属病院 高齢者歯科学分野医員
2011年　大阪大学歯学部附属病院 顎口腔機能治療部医員
2014年　東京医科歯科大学 高齢者歯科学分野助教
2017年　医療法人社団悠翔会 悠翔会在宅クリニック歯科診療部勤務

【抄録（ Abstract）】
歯科訪問診療では歯科治療が目的ではなく手段であり、歯科治療を通じて在宅療養生活を支える。要介護高齢者が増加し、医科歯科連携の必要性が認識され、歯科訪問診療の需要は高まっている。また、その内容は一般的な歯科治療から摂食嚥下障害や看取りへの対応に至るまで多様である。 多様な内容の一つに抜歯などの観血処置がある。多彩な疾患を持つ要介護高齢者を自宅で診療する歯科訪問診療では、全身管理が必要になる場合が多い。一方で、病気の人の診かたがわからないという声をよく聞く。病気の患者さんの診かたがわからないというのは、おそらく疾患の病態とそれに対して出される薬剤や歯科治療時に留意すべき点が連想的にでてこないのだと思う。病気や治療法、薬剤は日進月歩であり、キャッチアップも必要とされる。また、訪問診療の患者さんの全身状態はどんどん重症化している。このような状況のなかで、どのように全身管理を行うかは、日々の臨床の中で悩ましい問題である。 私は口腔外科や麻酔科の専門医ではなく、当学会の先生方と同じように悩みながら臨床をしている一臨床家に過ぎないのだが、今回は抜歯などの観血処置時に必要と思われる全身管理について、なぜ不得手であるのかの考察と全身管理の実際について、ケースを交えて自分が気をつけていることをお伝えさせていただければと思う。

©Japanese Society of Gerodontology